

『福井温故帖』にみられる建築 — 福井城下の視的考察 その24 —

伊豆蔵 庫 喜*

A study on the buildings in the book 'FUKUI-ONKOTYOU' — The sight of the Fukui castle town, part 24 —

Kouki Izukura

This paper deals with the buildings in the book 'FUKUI ONKOTYOU'. There are 19 pictures appeared in 'FUKUI ONKOTYOU'. The place in the drawn buildings is the same as the map of castle town at the late of Edo period. There are two kinds of Coloring pictures and the Indian-ink drawings for the expression of the picture. As for the Coloring pictures, these are described faithfully the building in detail.

1. はじめに

本研究は幕末頃の福井城下の情景を視覚的に検討するものである。これまで『福井城旧景』¹⁾(以下、『旧景』とする)や『馬威図』²⁾をもとに、絵図ごとに描かれている建築や町並み、城下周辺の様子について報告した³⁾。旧福井藩主松平家に所蔵されている『越葵文庫』⁴⁾の中に先の『旧景』同様、藩政時代の福井城下を描いた絵図を含む『福井温故帖』⁵⁾(以下、『温故帖』とする)が収蔵されている。

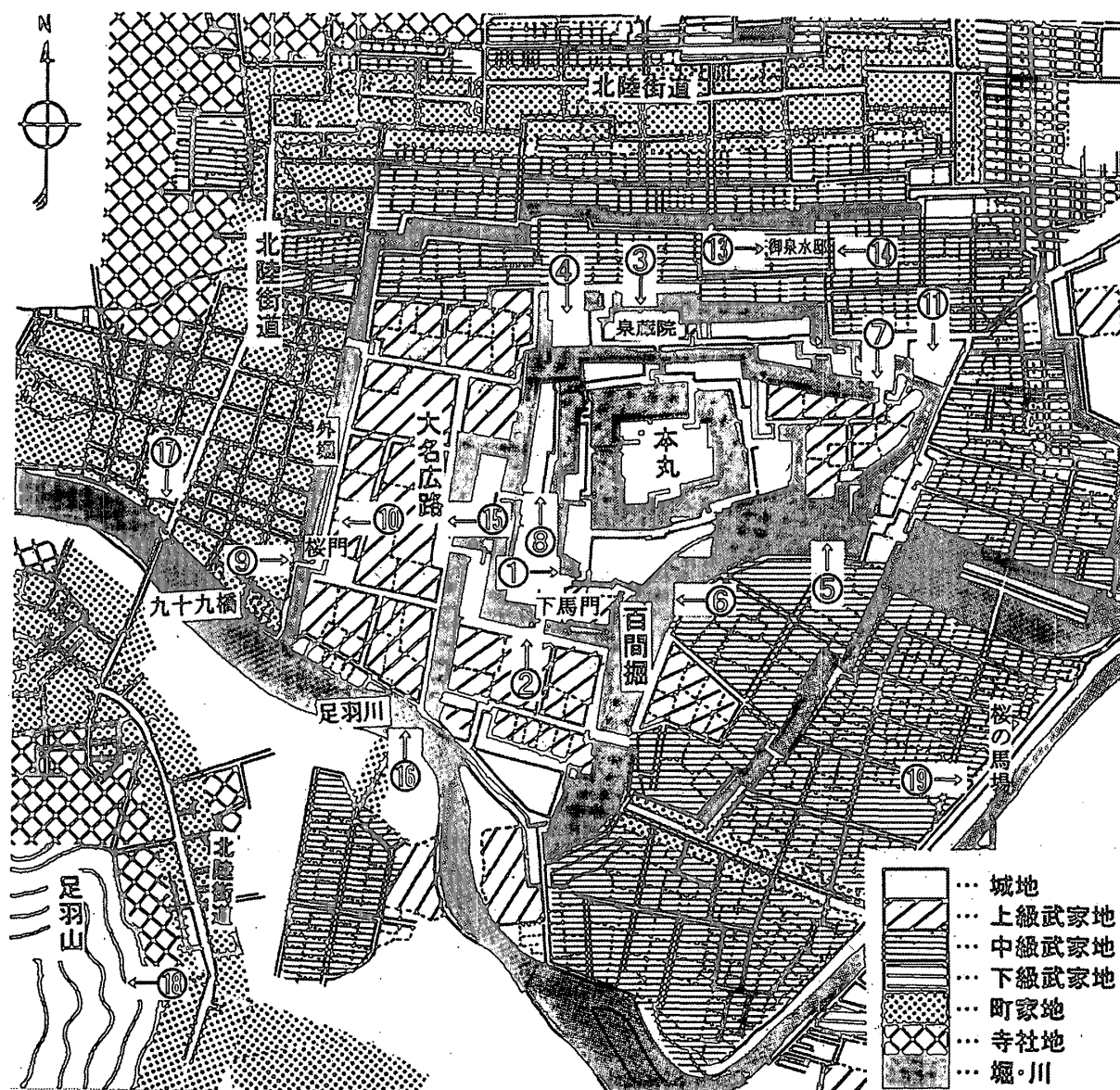
本稿は『温故帖』に掲載されている19図を紹介するとともに、文化3年(1806)および慶応年間(1865~67)の『福井御城下絵図』⁶⁾(以下、城下図とする)と比較しながら、城下における各図が描かれている位置や方向ならびに各図の信憑性について考察する。

2. 『福井温故帖』について

『福井温故帖』は現在、福井市立郷土歴史博物館に寄託されている。縦270mm×横188mm×厚さ82mmの折本構成の史料である。序文によると、この同帖は旧福井藩士の寺島知義が明治14年(1881)に作成したもので、幕末から明治にかけての福井城下の情景を描いた絵図の他、和歌を交えた随想などが収蔵されている。絵図の大きさは、ほぼ縦250mm×横365mmである。

作者の寺島知義⁷⁾は、明治初期に古絵図を収集または謄写した人物である。天保14年(1843)から御目付物書役を勤め、安政6年(1859)家督を相続して8石2人扶持を受けたが、明治4年(1871)6月廃藩につき免職となった。その後、明治6年(1873)1月足羽県が廃止となった際、旧藩の記録や絵図が廃棄されそうになったのを憂え、その保存方を願い出て許され下賜されたが、明治9年に再びこれらを松平家に献上した。『温故帖』も寺島が個人的に収集したものや、彼による写図のひとつとみられる⁸⁾。

* 建設工学科 建築学専攻



①	「本丸登城之図」	②	下馬御門付近	③	泉蔵院周辺
④	本丸遠望(北西より)	⑤	百間堀周辺	⑥	百間堀周辺
⑦	本丸遠望(北東より)	⑧	御座所	⑨	「桜御門之図」
⑩	桜御門(馬威し)	⑪	「調練場之図」	⑫	某建物の図
⑬	「御泉水之図」	⑭	「御泉水之図」	⑮	「藩政時代 大名町通」
⑯	「毛矢 繰船渡之図」	⑰	九十九橋北詰(照手門)	⑱	「藤島神社略図」
⑲	「櫻馬場之図」				

*図の名称のうち、「」付きは内題が記されているもの、
「」なしは、描かれている建物等を考慮して筆者が付けている。
⑫図の建物や位置に関しては、現状では確認できない。

図1 『福井温故帖』の19図の名称および描かれた位置や方向

3. 『福井温故帖』にみる建築

巻末に全 19 図を示した。これらは内容から主に城郭内を描いたもの、城下を描いたもの、周辺部の様子を描いたものに分けられる。これらをさらに表現方法を加味して区分したのが表 1 である。また、19 図の名称や描かれた位置や方向を城下図に示したものが前頁の図 1 である⁹⁾。

表 1 『温故帖』にみる建築内容と表現

	城郭内	計	城下	計	周辺部	計
彩色画	① ⑧	2	⑨ ⑩ ⑪ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯	7	⑰ ⑲	2
墨絵	② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	6		0	⑱	1

(1) 城郭内

①図～⑧図の 8 図は、城郭内の建物を中心に描いたものである。①図は南二ノ丸の太鼓御門付近より本丸の南面を描いたもので、中央に福井城の正門である瓦御門がみられる。②図はその南の下馬御門の手前から、北東方向の百間堀と隅櫓を描いたものである。

③図と④図には本丸の北側が描かれている¹⁰⁾。③図の中央に泉蔵院と御宮(東照宮)がみられる。④図は③図同様、本丸の北西隅を描いており、隅櫓や宗像宮の屋根の一部がみられる。⑤・⑥図は百間堀を東方から望んだもので、湾曲する広大な百間堀の様子や堀沿いに建つ隅櫓が描かれている。

⑦図は本丸の北東部より南西方向を描いたもので、奥にみえる山は足羽山と思われる。⑧図は、16 代慶永が西三ノ丸に移した頃の御座所を描いている¹¹⁾。

(2) 城下

城下に関するものは、⑨図～⑪図と⑬図～⑯図までの 7 図である。⑨・⑩図には武家地と町人地を分ける福井城西側の 4 重目の堀沿いにある桜御門付近が描かれている。特に、⑩図は毎年正月 14 日に行われていた馬威しの模様が描かれ、馬威しの華やかな雰囲気を感じられる¹²⁾。

⑬図と⑭図は、本丸の北方にあった藩主の別邸『御泉水邸』を描いている。邸内の西から東方をみた⑬図は、大きな池泉とこれに臨む数奇屋風の書院群が詳細に表現されている。一方、⑭図は、東から西方をみたもので、庭の大半を占める池と点在する茶室がみられ、当時の回遊式庭園の様子が窺える。

⑮・⑯図の 2 図は、主に武家地を描いている。⑮図は内題に「藩政時代・大名町通」とあり、福井城本丸の西側を南北に通る大名広路沿いの粕木工家と酒井孫四郎家の屋敷を描いている。両家とも藩の高知席で、通りに面して長屋門と土塀が建ち、長屋門の後方には御殿もみられる。

⑯図は、足羽川の南岸から橋北の武家地を描いている。北岸の屋敷は松平主馬家で、先の粕家や酒井家と同じ高知席の家である。やはり通りに面して長屋門と土塀が続き、後方に御殿がみえる。左手前には足羽川を渡る毛矢の繰舟が描かれている。

(3) 周辺部

⑭図～⑯図の3図は、城下の周辺部を描いたものである。⑭図は福井城下の交通の要所であった九十九橋の北詰の様子を描いており、手前が照手門、その脇に高札場がある。九十九橋に旅人の姿はみられるが、この橋の特徴である半石半木の様子は確認できない。

⑮図は内題に「藤島神社略図」とあり、橋南の足羽山の山裾にある藤島神社の図である。左手前に鳥居がみられ、それに続いて拝殿・本殿が順に高くなっている状況が窺える。

⑯図は城下の東南隅、荒川の土居沿いにあった桜の馬場を描いている。中央から左手奥にかけて、桜の木が横一列続いている。馬場の長さは226間、騎乗の武士の姿もみられる。左側一帯には下級武士の屋敷とみられる茅葺き屋根が点在している。

4. 『福井温故帖』の表現

表1に示したように、19図の表現には2種類みられる。一つは建物や樹木の細部に至るまで、彩色が施されているもので(彩色画と呼ぶ)、もう一つは絵全体が墨で描かれているもの(墨絵と呼ぶ)である。前者は12図、後者は7図ある。後者の墨絵は、これまでの『旧景』や『馬威図』の中には1枚もみられない。

(1) 彩色画

彩色画は①・⑧図(城郭内)、⑨図～⑪図と⑬図～⑯図(城下)、⑰図・⑱図(周辺部)および位置の分からない⑫図を含む12図である。このうち、①図と⑮図を例にとり、表現方法をみることにする。

①図をみると、太鼓御門(手前)と瓦御門(奥)の屋根は、いずれも入母屋造で、丸瓦や軒丸瓦も表されている。色は青色で、たて線が入っている。2階の外壁は白漆喰壁で、壁面に武者窓が付いている。石垣の左右端は巽櫓と坤櫓がみられるが、両櫓は3重で、1重と2重には唐破風や千鳥破風が付き、3重目の屋根の両端に鯪鉾がのっている。屋根の色はやはり青色で、たて線が描かれていて、丸瓦や軒丸瓦も表現されている。瓦御門の後方には本丸御殿の屋根の一部が描かれている。屋根は茶褐色に彩色されていて、たて線が入っている。この他、太鼓御門の脇にある番所の屋根は黄緑色でよこ線が入り、右手前の3棟の屋根は灰色で、たて線とよこ線が入り、棧瓦が表されている。樹木の表現や色分けにも違いがみられる。左隅の木のように濃緑色に葉の先端が尖っている針葉樹系のものと、二ノ丸中央や本丸石垣上の木のように、薄緑色で葉や枝が丸みを帯びている広葉樹系のものがある。太鼓御門の内側や御本城橋の上には、裃姿の武士とともに荷物を背負った家臣の姿も描かれている。

一方、⑮図は大名広路沿いの酒井孫四郎家(左)と粕木工家(右)の屋敷を描いているが、長屋門と御殿の屋根の表現は同じで、色は濃茶色、よこ線が示されている。長屋門の腰下は酒井家が海鼠壁で、粕家は板張りである。この図もやはり通りには、駕籠の列や裃姿の武士もみられる。

このように、①図と⑮図の彩色画は建物や樹木、人物などの様子をかなり忠実に描写している。特に、個々の建物は建築形態やその特徴を繊細に描いており、かなり信憑性が高いといえる。

(2) 墨絵

墨絵は②図～⑦図(城郭内)、⑩図(周辺部)の7図である。7図のうち、北三ノ丸付近を描いた③図と、百間堀越しに南二ノ丸の東側を描いた⑥図の表現をみる。

③図は、中央の清水御門の屋根に彩色はなく、たて線が示されているのみである。泉蔵院と東照宮ならびに北二ノ丸の隅櫓の屋根は、薄墨が塗られているだけで、線の書き込みはみられない。一方、清水御門の扉や窓、隅櫓の鯨鉾や破風などの描写はいたって稚拙であり、位置や形態もあまり信頼できない。

⑥図にみられる南二ノ丸の隅櫓や切手御門の屋根もやはり薄墨が塗られ、たて線が入っているだけである。しかも櫓には破風もなく、窓の位置は曖昧で建物の詳細を正確に描いたものとは言いがたい。墨絵は彩色画とは違い、建物の描写はかなり簡略されているとみてよい。

5. 城下図との比較

『福井温故帖』の19図を、文化3年および慶応年間の城下図と比較してみる。①図の南二ノ丸の太鼓御門、内堀に架かる御本城橋、御本城橋を渡った所の瓦御門、石垣の左右隅の巽・坤両櫓の位置は、文化3年や慶応年間の城下図とも一致している。また、福井城の天守は寛文9年(1669)に焼失して以来、再建されていないが、①図では坤櫓の後方の石垣上に「御天守台」と記されているだけで、天守がないことも合致している。

⑤図の大名広路沿いの酒井孫四郎家(左)と粕木工家(右)の2つの屋敷は、城下図でも同じ状態で一致する。⑩図の足羽川北岸の松平主馬家(左)と酒井外記家(右)も城下図と一致している。ただし、繰舟は文久2年(1862)に新橋(幸橋)が架橋された¹³⁾後は廃止されたと思われる、この図はそれ以前の様子を描いていることになる。

建物の表現はさほど正確でない墨絵であるが、②図の下馬御門から左手奥に続く石垣や隅櫓の位置、百間堀の湾曲する形状などは、城下図と同じである。③図の泉蔵院(右)と東照宮(左)も、城下図でも北三ノ丸の西に泉蔵院、東に東照宮があり、位置関係は合っている。

⑪図の調練場がある東三ノ丸一帯は、文化3年の城下図では武家地で、慶応の城下図では空き地になっている。したがって、⑪図は明治に入ってからの様子を描いていることがわかる。

6. おわりに

以上のように、『福井温故帖』に含まれている19図を紹介し、合わせて幕末の城下図と比較した。その結果、各図にみられるほとんどの建物は位置関係や描かれた方向が城下図と一致し、これら各図は⑪図を除けば、ほぼ幕末頃の福井城や城下の情景を描いたものとみてよい。

19図の中でも彩色画は、城下の情景とともに、建物の詳細も忠実に描いており、幕末期の福井城下の景観を知る上で貴重な絵図史料といえる。

今後は、主に彩色画にみられる城門や櫓、武家屋敷など建物の表現方法を、『旧景』の描写方法と比較しながら相違点などについて検討したい。

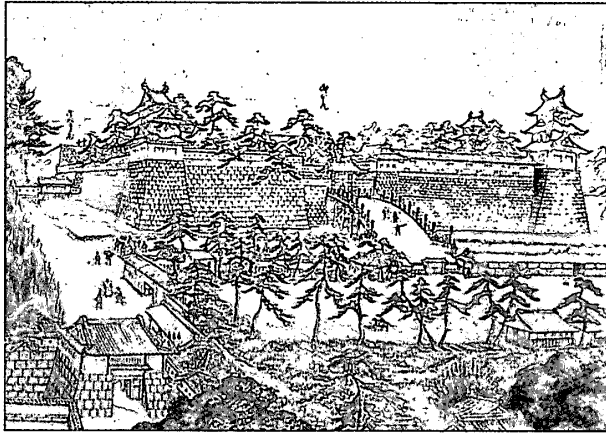
【註】

- 1) 松平宗紀氏所蔵『松平文庫』福井県立図書館保管
- 2) 『馬威しの図』福井市立郷土歴史博物館所蔵『春嶽公記念文庫』
『馬威図』福井県立歴史博物館所蔵
- 3) 伊豆蔵庫喜・吉田純一「福井城下の視的考察1～23」日本建築学会大会学術講演梗概集・同北陸支部研究報告集および福井工業大学研究紀要で報告している。(1995～2003)
- 4) 『越葵文庫』は、松平宗紀氏が福井市の要請を受け昭和52年(1977)と54年(1979)の2次にわたり、福井市立郷土歴史博物館に寄託した旧藩関係史料である。『松平文庫』が越前松平家福井事務所に疎開、保管されていた福井藩の史料であるのに対して、『越葵文庫』の史料等は東京本邸に所蔵されていた史料である。
- 5) 松平宗紀氏所蔵『越葵文庫』福井市立郷土歴史博物館保管
- 6) 註1と同じ、『福井御城下絵図』文化3年(1806)および慶応年間(1865～67)
- 7) 福田源三郎『越前人物誌 中・下巻』思文閣(1972) p257 参照
- 8) 現在、『松平文庫』に所蔵されている慶長17年(1612)頃の『北庄四ツ割図』や万治2年(1659)以前の『福居城下絵図』の写図も寺島知義によるものである。
- 9) 表1ならびに図1の番号は便宜上、筆者が付けたもので『福井温故帖』における掲載順ではない。
- 10) 本丸の北側を描いた絵図は、『福井城旧景』や『馬威図』にはみられない。
- 11) 御座所は、初代秀康～4代光通までは本丸内にあり、その後5代昌親の代に西三ノ丸に移され、13代治好の代まで西三ノ丸に置かれていた。14代斉承は文政13年(1830)に再び御座所を本丸内に移したが、16代慶永が天保14年(1843)に再度西三ノ丸に移した。その後、元治元年(1864)には東三ノ丸に御座所が新設されている。
- 12) 馬威しは、毎年正月14日に左義長神事として行われ、馬に乗った藩士が桜御門から城外に乗り出し、本町・呉服町を疾駆しながら柳御門に入って城内に戻る福井藩の年中行事であった。馬威し当日に限り、町人の城郭内への立ち入りが許されていた。
- 13) 『福井市史 資料編別巻 絵図・地図』福井市(1989) p152 参照

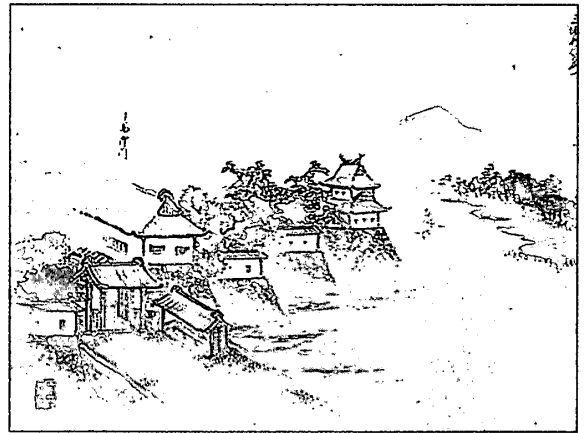
謝辞：『福井温故帖』の閲覧ならびに撮影に際しては、福井市立郷土歴史博物館の協力を戴きました。
ここに記して感謝申し上げます。

付図 『福井温故帖』掲載の19図

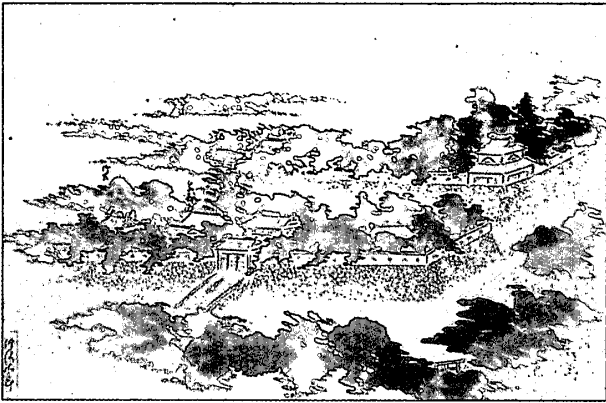
(『福井温故帖』より)



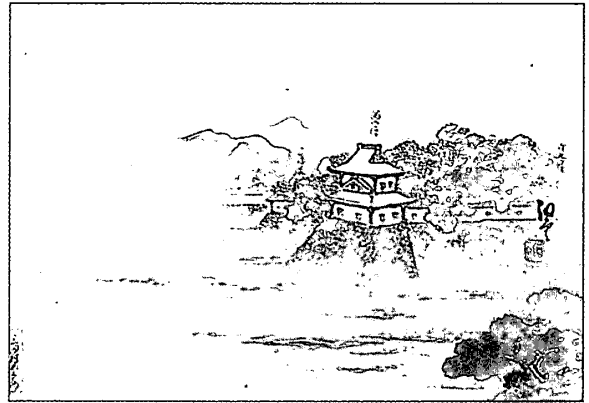
①「本丸登城之図」



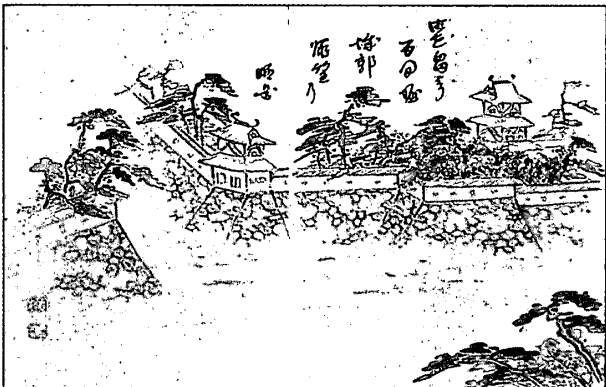
②下馬御門付近



③泉蔵院周辺



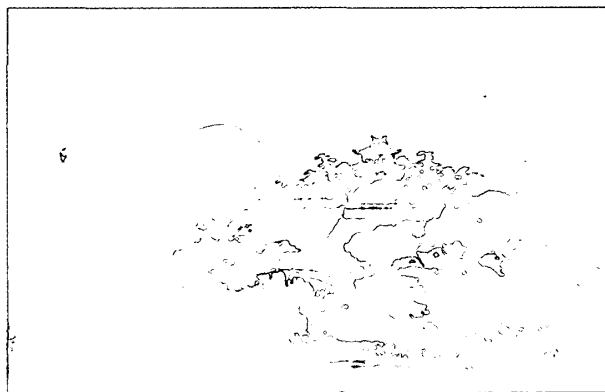
④本丸遠望(北西より)



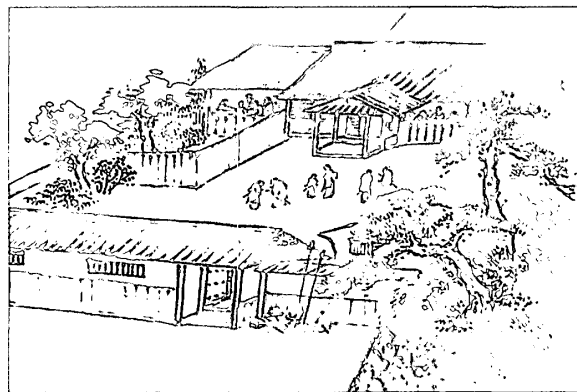
⑤百間堀(南東より)



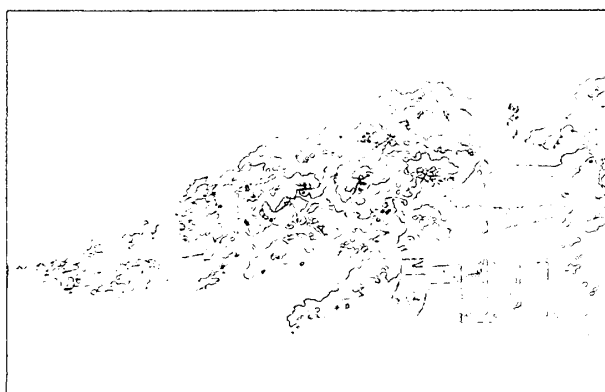
⑥百間堀(東より)



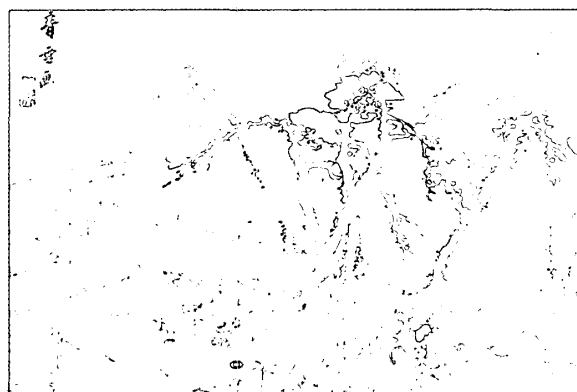
⑦本丸遠望(北東より)



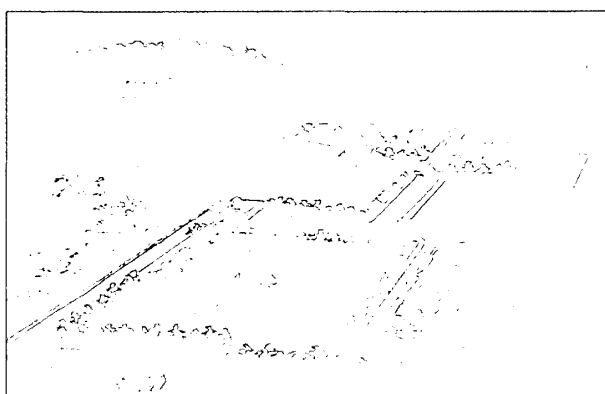
⑧御座所



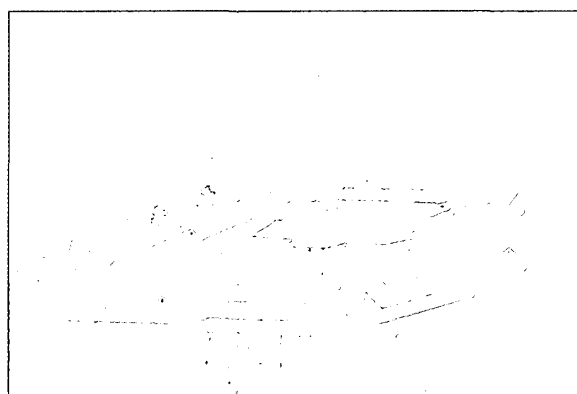
⑨「櫻御門之図」



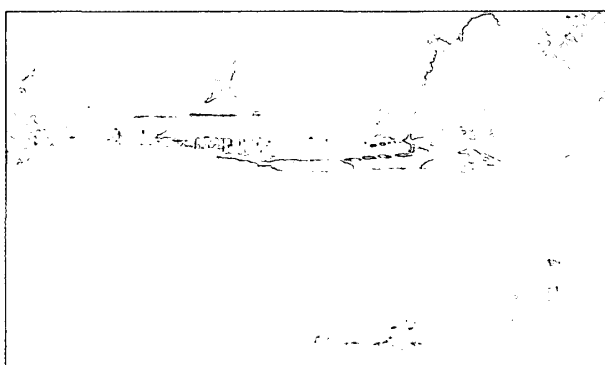
⑩桜御門付近(馬威し)



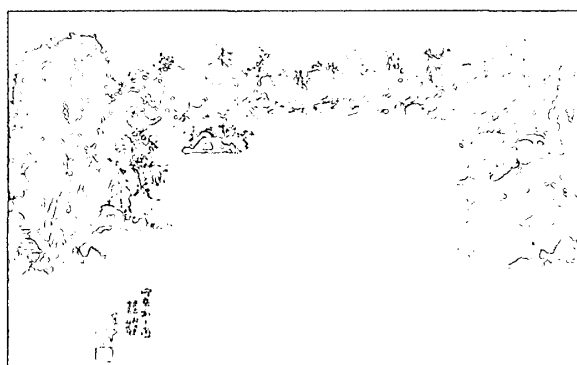
⑪「調練場之図」



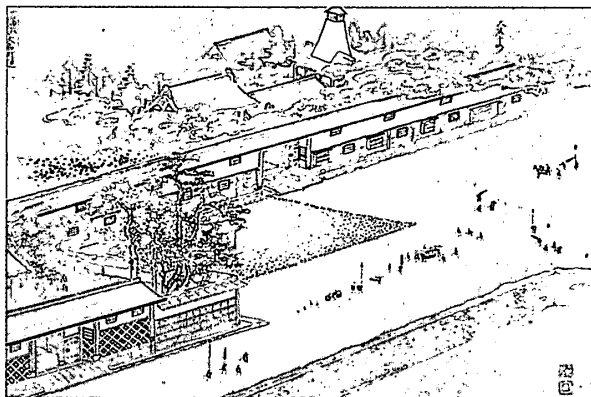
⑫某建物の図(建物や位置は、現状では確認できない)



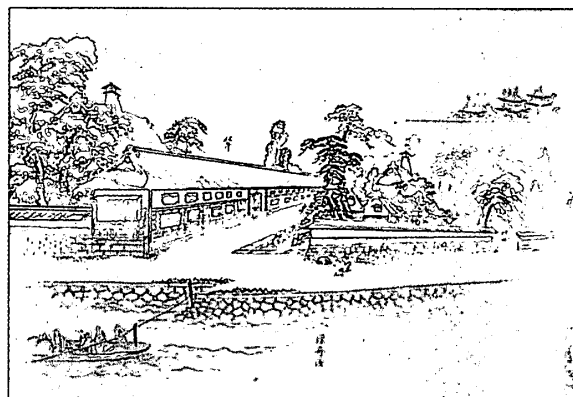
⑬「御泉水之図」



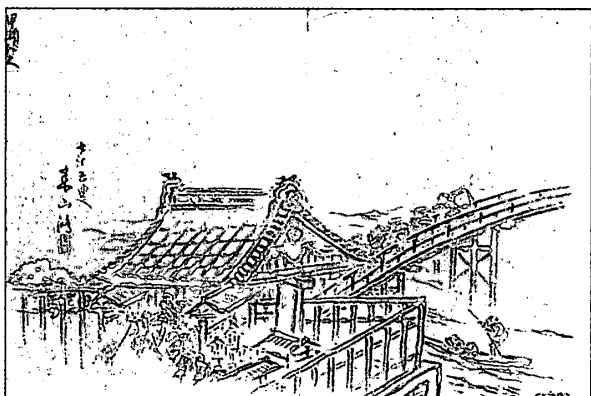
⑭「御泉水之図」



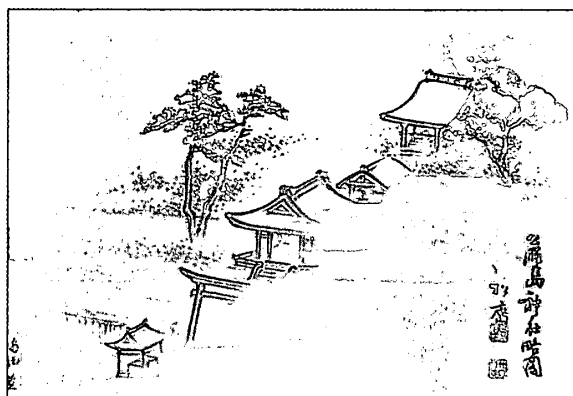
⑮「藩政時代 大名町通」



⑯「毛矢 繰船渡之図」



⑰九十九橋北詰め(照手門)



⑱「藤島神社略図」



⑲「櫻馬場之図」

(平成16年11月24日受理)